

マーティン・ワイトの歴史叙述：

『パワー・ポリティクス』と書評「ヒンズリー『権力と
平和の模索』」を手がかりに

荻谷千尋（金沢大学）

2024年5月11日

グローバル・ガバナンス学会



エピグラム

I. 問題の所在と限定

III. ワイトの歴史哲学と『パワー・ポリティクス』

エピグラム

エピグラム：ジェームズ・マックイントッシュ

これら〔政治にかかわる、莫大で複雑な組み合わせと原因〕を、理論に還元することは確かに可能である。しかしながら、もっとも広範囲にわたる視野と、もっとも包括的で柔軟な諸原則にもとづいて形成された理論でなければ、これらの多様性をすべて包含し、また、その急速な変転に合わせることはできない。この理論のもっとも基本的な格言は、この理論自体への不信と、実用的な慎慮への敬意である。



エピグラム：ロナルド・サイム

最悪の状況を知り、安らぎ、希望、信頼の根拠をほとんど見出せず、それでも人間の尊厳と言論の自由を信じた歴史家（タキトゥス）と長年にわたって付き合うことができたことは、幸運であり特権である（『タキトゥス』、1958）



I. 問題の所在と限定

問題の所在と限定：報告者について

- ・ 専門：政治思想史；国際政治思想史
- ・ 主対象：エドモンド・バーク



図 1: Edmund Burke

目的と問題背景

- ・ 目的：マーティン・ワイト（1913-1972）の歴史叙述の特徴の解明
- ・ 問題背景：歴史的アプローチと社会科学的アプローチの対立のなかで見失われている、英国学派の個性、ワイトの個性の発掘

近年の重要な研究成果

1. Journal of International Political Theory
 - 特集号「解釈主義と国際関係の英国学派」
 - 編者：マーク・ビーヴァーとイアン・ホール
2. デイビッド・ヨスト編のワイト著作集
 - オックスフォード大学出版会

英国学派の問題点

英国学派はその魅力を広く伝えることに苦しみ、他の学派と区別することが困難な論題やアプローチに焦点を合わせてしまっている。同時に、英国学派は新たな研究の道を切り開く可能性のある他分野や他学派との結びつきを十分に活用することもできていない(Bevir と Hall (2020))。

新世代の英国学派の研究は、構成主義との境界線がますます曖昧になっている (Zhu (2024))

英国学派の問題点の原因

1. 英国学派に混在する二つの系譜
 - ・ 解釈主義と構造主義
2. 解釈主義に沿って国家間関係を論じる者の減少

解釈主義

- ・ 人間の行動は、世界がどのように機能しているか、また、その目的を達成するために何を為すべきかについての信念、概念、理論の集合として緩やかに理解しているものに依拠
- ・ 制度に対する人びとの信念 > 制度や構造
- ・ ➡ 英国学派のなかでもバターフィールドとワイトに濃厚に見られる特徴

ビーヴァーとホールの提案

- ・ 英国学派は「個人や制度の外形的な特徴ではなく、行為者の行動の**意味**を決定づけるものに焦点を合わせるべき

問題の所在と限定：解釈主義におけるワイト

解釈主義におけるワイト

- ・ 「気乗りのしない」モダニスト

同時代的コンテクスト

1. 発展的歴史主義の危機
 2. 社会科学の台頭
- ・ ➡ バターフィールドとワイトは発展的歴史主義と社会科学の双方の受け入れを拒否
 - ・ ➡ 「気乗りのしない (reluctant) モダニズム

問題の所在と限定：解釈主義におけるワイト

彼らは二人とも進歩主義の本質を嫌い、その叙述がしばしば道德主義的であることに苦言を呈した。彼らは、ナショナリズムに対する進歩主義の手ぬるい扱い、国民国家こそが自由を実現するための最良の手段であるという思い込みを非難した。しかし彼らは、モダニストの社会科学が望ましいとは考えなかった。彼らは、概して、社会科学が暗黙裏に進歩主義的であることを懸念し、また、社会科学があまりに狭義の功利主義だと主張した(Bevir と Hall (2020))。

ワイトの歴史哲学

- ・ キリ基督教信仰から進歩主義を拒否
- ・ バターフィールドの中立的な歴史叙述を拒否
- ・ クローチェとコリングウッドの解釈主義に立脚
- ・ ➡ 発展的な歴史主義を拒むワイトの歴史的アプローチを支える理論的一貫性は何か

Ⅲ. ワイトの歴史哲学と『パワー・ポリ ティクス』

1. 歴史哲学：「歴史と国際関係研究」

「歴史と国際関係研究」

- ・ History and the Study of International Relations, 1954-1956.c

ワイトの問題意識

- ・ 歴史上の出来事は固有な事象として叙述すべきか、それとも、出来事のあいだを類推するような一般性を備えているのか
- ・ 国際政治のように、類似の出来事が少ないが、世界に与える影響力が甚大である場合に、歴史叙述はどうあるべきか
- ・ R. G. コリングウッドの『歴史の観念』（1946年）からの示唆

1. 歴史哲学：「歴史と国際関係研究」

私たちは「歴史」という言葉を、過去の実際の出来事という意味と、それを歴史家が再構成した物語という意味の、2つの意味で用いている。しかし、過去に実際に起こった出来事は、私たちの目に触れることはない。歴史家が再構成したもののなかにしか存在しないのである（Wight (2023a)）。

歴史上の出来事のあいだの類似性は、天界上のあるパターンに適合するから生じるのではなく、歴史家の心のパターンに適合することから生じるのだろう。もしそうだとすれば、一般化のプロセスは循環するプロセスである。過去の出来事を、他の過去の出来事から導き出されたパターンに適合するように再構成し、その適合性そのものから一般化を読み取るのである（Wight (2023a)）。

- Bevir, Mark, と Ian Hall. 2020. 「Interpreting the English School: History, Science and Philosophy」. *Journal of International Political Theory* 16 (2): 120–32. <https://doi.org/10.1177/1755088219898884>.
- Hinsley, F. H. 1963. *Power and the Pursuit of Peace: Theory and Practice in the History of Relations between States*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wight, Martin. 2023a. 「History and the Study of International Relations」. *History and International Relations*, 編集者: David S. Yost, 41–49. Oxford: Oxford University Press.
<https://doi.org/10.1093/oso/9780192867476.003.0003>.
- . 2023b. 「Does Peace Take Care of Itself?」 *Foreign Policy and Security Strategy*, 編集者: David S. Yost, 79–85. Oxford: Oxford University Press.
<https://doi.org/10.1093/oso/9780192867889.003.0004>.
- Zhu, Yuan Yi. 2024. 「Review "International Relations and Political Philosophy" (by Martin Wight)」. *International Affairs* 100 (1): 408–9.
<https://doi.org/10.1093/ia/iiaad331>.

高坂正堯. 1964. 「いかなる国際機構が平和をもたらしうるか : F. H. Hinsley, *Power and Pursuit of Peace*, 1963」. 法学論叢 74 (5): 124–36.